

氏名(本籍)	<small>かない みつよ</small> <b>金井 光代(神奈川県)</b>
学位の種類	博士(学術)
学位記番号	博甲第 28 号
学位授与年月日	平成 28 年 3 月 15 日
学位授与の要件	共立女子大学大学院学則第 41 条第 1 項該当
論文題目	<b>日本人の“衣服における季節感表現”に関する研究 -その特徴と文化史的背景-</b>
論文審査委員	(主査) 教授 長崎 巖 教授 熊谷 仁 教授 藤田 雅夫 教授 青木 英明 教授 小原 敏郎

## 論文内容の要旨

本研究は、日本人の衣服と季節の関係に注目し、文献資料・絵画資料・現存遺品・アンケート調査の分析を通して、平安時代から現代までを通覧し、日本人の“衣服における季節感表現”の本質を明らかにした初めての研究である。

先行研究においては、平安時代に行われていた「かさね色目」による“衣服における季節感表現”が日本人には脈々と受け継がれている、とするのが通説であったが、その根拠を明確に示すものはなかった。そこで本研究では、曖昧に語られてきた日本人の“衣服における季節感表現”の本質を解明することを目的とした。

なお、季節変化に対する衣服の対応には物理的対応と心理的対応がある。物理的対応は、寒暖の変化や、暦の区切りを目安に行われる衣替えであるのに対し、心理的対応は、情緒的視点による衣服選択で、季節に合う色や柄を選ぶことである。本論文では後者を“衣服における季節感表現”と定義し、本論文のキーワードとする。

本論文は7章で構成されている。第1章は序論とした。

第2章では、本論文のキーワードである「季節感」と「季節」の語が出現した時期とその要因について検討した。「季節感」の語は第二次大戦後、「季節」の語は明治時代中期以降に新たに出現した語であることを明らかにした。

第3章では、現代の衣服(洋服・和服)と季節との関連について検討した結果、現代人は

“衣服における季節感表現”を重視していることが明らかになった。

第4章では、平安時代から桃山時代までの衣服と四季との関連について検討した。平安時代の公家が用いたかさね色目により、日本服装史上初めて“衣服における季節感表現”が出現した。先行研究では、かさね色目は、自然を手本にその色を模したものとされてきたが、筆者は、かさね色目を見立ての技法の一種と解釈することで、衣服の着用という日常行為が、高度な衣文化にまで引き上げられたとする説を提唱する。続く鎌倉時代以降は、公家に代わり武家が政権を担った時代である。武家はその当初は、かさね色目をを用いた重ね着形式の衣服を着用していたが、鎌倉時代後期にはすでに、かさね色目による“衣服における季節感表現”は形骸化し失われる。一方、室町時代までは、略装へと変化しつつも、かさね色目に模様という要素を加味し“衣服における季節感表現”を継承していた公家も、桃山時代には、衣服の色や意匠を自由に選び始め、武家だけでなく公家の間でも“衣服における季節感表現”は失われたことが明らかになった。

第5章では、江戸時代の小袖と四季との関係について検討した。江戸時代の女性の小袖は、時期、身分によって、様式は変遷したが、どの時期、どの身分の女性においても、季節に合わせて小袖模様を選んでいる様子は見られず、前代に引き続き“衣服における季節感表現”は失われたままであった。

第6章では、明治・大正時代の衣服と季節の関係について検討した。明治時代後期に“衣服における季節感表現”が出現したことが明らかになった。それは春と秋の着物を色合いや模様という心理的視点から区別し始めたことによる。その背景には、欧米文化の流入により発達した新しい女性文化がある。続く大正時代は、この“衣服における季節感表現”が、大衆にまで普及する。彼女らは、経済的に余裕のない生活を送りながらも、活発な消費意欲を持っており、百貨店、婦人雑誌の重要な顧客となり、消費文化を牽引する存在となり、ひいては、“衣服における季節感表現”の普及をも担う存在になった。なお、この時期に出現、普及した“衣服における季節感表現”は、平安時代のかさね色目を彷彿とさせるが、両者を詳細に検討した結果、その成り立ち、背景、目的など、異なる点が多く、一見類似してはいるものの、両者は本質的に異なるものであることが明らかになった。

第7章では、結論として本研究で得られた新知見を以下の3つにまとめた。成果1. 日本人が踏襲してきたとされる“衣服における季節感表現”の真相を解明したこと、成果2. 「季節感」と「季節」の語が出現した時期とその理由を解明したこと、成果3. 日本人の“衣服における季節感表現”の本質を解明したこと、である。従来通説とされていた、日

本人が平安時代から“衣服における季節感表現”を脈々と受け継いできたとする説は本研究によって覆された。桃山時代から江戸時代の間は、“衣服における季節感表現”が失われていたことと、明治時代に出現した“衣服における季節感表現”は平安時代のかさね色目によるそれとは本質的に異なるものであることが明らかになったためである。しかし、これまで多くの先行研究で両者が同質のものとして語られてきた理由は、明治時代以降の「季節」に対する認識で平安時代の“衣服における季節感表現”を語ってきたことによる。本研究は、古代から現代まで通史的に研究したことに加え、「季節」の語が明治時代に新たに出現した語であることを解明したことにより、日本人の“衣服における季節感表現”の本質を明らかにすることができた。

以上の成果は、日本服装史における通説を覆す新発見であり、服飾文化の進展に寄与すると考える。

以上

## 論文の審査結果の要旨

本論文は、日本人の衣服と季節の関係に注目し、文献資料・絵画資料・現存遺品・アンケート調査の分析を通して、平安時代から現代までを通覧し、日本人の“衣服における季節感表現”の本質を明らかにした初めての研究である。

先行研究においては、平安時代に行われていた「かさね色目」による“衣服における季節感表現”が日本人には脈々と受け継がれている、とするのが通説であったが、その根拠を明確に示すものはなかった。そこで本研究では、曖昧に語られてきた日本人の“衣服における季節感表現”の発生の経緯と歴史、その本質を解明することを目的としている。

なお、季節変化に対する衣服の対応には物理的対応と心理的対応がある。物理的対応は、寒暖の変化への対応や、衣替えであるのに対し、心理的対応は、情緒的視点による衣服選択で、季節に合う色や柄を選ぶことである。本論文では後者を“衣服における季節感表現”と定義し、本論文のキーワードとしている。

結論として、本研究で得られた新知見を以下の3つにまとめた。成果1は、日本人が踏襲してきたとされる“衣服における季節感表現”の真相を解明したことである。従来通説とされていた、日本人が平安時代から“衣服における季節感表現”を脈々と受け継いでき

たとする説は誤りであり、鎌倉時代以降次第にそれは弱まり、桃山時代から江戸時代の間は、“衣服における季節感表現”は失われていたことと、明治時代に出現した“衣服における季節感表現”は平安時代のかさね色目によるそれとは本質的に異なるものであることを明らかにしたことである。

成果2は、「季節感」と「季節」の語が、それぞれ戦後、及び明治時代に出現したことと、その理由を解明したことである。そして3は、日本人の“衣服における季節感表現”の歴史の実態を解明したことである。これまで多くの先行研究で、平安時代に行われていた「かさね色目」による“衣服における季節感表現”と、明治時代以降の“衣服における季節感表現”が同質のものとして語られてきたのは、明治時代以降の「季節」に対する認識で平安時代の“衣服における季節感表現”を語ってきたことによることを明らかにしたことがある。

以上の成果は、日本服装史における通説を覆す新発見であり、服飾文化の進展に寄与すると考える。最終試験にも合格しており、審査員一同は、博士（学術）の学位論文として価値あるものと認める。